

梅北北原遺跡

Umekita kitabaru Site

—公立中学校施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2007年10月

宮崎県都城市教育委員会

序 文

本書は市内校舎建替え事業に伴って都城市教育委員会が実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書です。

調査の結果、縄文時代早期（約8000～9000年前）の集石遺構を中心とした遺構、遺物が検出されました。

都城盆地におきましては同時期遺跡の調査例が未だ数少ない状況にあり、今回の調査はこの時期の様相を明らかにする上で貴重なものです。

また、今回の発掘調査現場は都城市立中郷中学校敷地内でもあり、生徒の皆さんに調査現場を直接見学いただきました。授業では体験できない歴史を間近に見ることができたかと思います。本書が学術資料としてだけでなく、学校教育、生涯学習の場でも活用され、文化財への認識・愛着へと繋がることを願います。

調査期間中にご協力を賜りました中郷中学校関係者の皆様を始め、発掘作業に従事していただきました市民の皆様に厚く御礼申し上げます。

2007年10月

教育長 玉利 譲

例 言

- 1 本書は公立中学校施設整備事業に伴い、発掘調査した梅北北原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は都城市教育委員会が主体となって行い、同文化財課主事 加賀淳一が担当した。
- 3 本書に使用したレベル数値は海拔絶対高で、基準方位は座標北 (GN) である。使用した座標数値は国土座標（世界測地系）に基づいている。
- 4 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真的番号は一致する。
- 5 土層と遺物の色調は『新版標準土色報』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
- 6 現場における遺構の実測は作業員の協力を得て加賀が中心となってこれを行った。遺構実測図の製図はすべて加賀が行った。
- 7 本書に掲載した遺物は整理作業員、加賀が実測し、製図は加賀が行った。
- 8 遺構・遺物の写真撮影は加賀が行った。
- 9 自然科学分析については株式会社古環境研究所へ委託した。
- 10 本書で用いる遺構の略記号は以下の通りである。
SS = 集石遺構
SC = 土坑
- 11 出土遺物の整理、報告にあたり文化財課主事 山下大輔の協力・助言を得た。
- 12 本書の執筆・編集は加賀が行った。
- 13 発掘調査で出土した遺物とすべての記録（写真・図面等）は都城市教育委員会で保管している。

目 次

本文目次

第1章 序	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第2章 周辺の環境と歴史	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	4
第1節 発掘調査の方法と概要	4
第2節 梅北北原遺跡の基本層序	6
第3節 繩文時代の遺構	8
第4節 繩文時代の遺物	14
第5節 その他の遺物	15
第4章 自然科学分析	16
第5章 まとめ	25
挿図目次		
第1図 遺跡位置図	2
第2図 調査区トレンチ配置図	4
第3図 梅北北原遺跡遺構配置図	5
第4図 梅北北原遺跡基本土層模式図	6
第5図 調査区北壁土層断面図	7

第6図 8層上面標群の平面分布	8
第7図 SS01・SS02・SS03・SS04実測図	9
第8図 SS05・SS06・SS07・SS08実測図	11
第9図 SS09・SS10実測図	12
第10図 土坑実測図	13
第11図 繩文時代の遺物（土器）	14
第12図 SS05出土剥片	14
第13図 その他の遺物	15
第14図 梅北北原遺跡の土層柱状図①	21
第15図 梅北北原遺跡の土層柱状図②	22

表目次

第1表 梅北北原遺跡集石遺構一覧	12
第2表 梅北北原遺跡出土土器観察表	15
第3表 テフラ検出分析結果	20
第4表 屈折率測定結果	20
第5表 梅北北原遺跡に関するテフラの放射性炭素(¹⁴ C)年代と曆年較正年代	20
図版目次		
図版1	29
図版2	30
図版3	31
図版4	32

第1章 序

第1節 調査に至る経緯

都城市立中郷中学校は都城市梅北町に所在し、全校生徒約300名を数える中規模校である。学校敷地内の北側校舎は昭和41年に建設されており、耐震構造上の問題から校舎建替えの必要性が生じた。この校舎建替え工事計画に際し、平成17年11月22日に都城市教育委員会教育総務課より対象地における文化財所在有無確認が同文化財課になされた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「梅北北原遺跡（遺跡番号：7047）」に位置しており、文化財課では遺跡確認の為の試掘・確認調査を平成17年12月1日に実施した。その結果、対象地の北西部において繩文時代早期の遺物包含層が確認された。この結果をもとに教育総務課側と協議し、校舎基礎工による破壊部分については発掘調査を実施することで合意した。

旧校舎は翌平成18年8月に解体工事が終了し、同年9月21日に校舎解体後跡地の詳細な遺跡範囲確認調査を実施し、発掘調査区の設定を行った。その結果工事予定地の西側312m²を調査区として設定し、発掘調査を実施した。調査期間は平成18年9月21日から平成18年12月19日（実質調査日数：44日）までである。

調査期間中11月7日～9日にかけては中郷中学校生徒（社会科選択）を対象として見学会を実施し、約100名の参加があった。

第2節 調査体制（平成18年度～平成19年度）

平成18年度の組織（発掘調査）

・調査主体	宮崎県都城市教育委員会	
・調査責任者	教育長	玉利 譲
・調査事務局	教育部長	今村 昇
	文化財課長	高野 隆志
	文化財課長補佐	新宮 高弘
	文化財課埋蔵文化財担当副主幹	矢部喜多夫
・調査担当者	文化財課主事	加賀 淳一

・発掘作業従事者

立山君子　蒲生ミツ子　南スミ子　中原忠珍　二見義彦　津曲節子　平山甲子郎　小山田福子
宮本孝子　抜追清美　馬籠恵子

・整理作業従事者

内村ゆかり　児玉信子

平成19年度の組織（報告書作成）

・調査主体	宮崎県都城市教育委員会	
・調査責任者	教育長	玉利 譲
・調査事務局	教育部長	岩崎 透
	文化財課長	高野 隆志
	文化財課主幹	新宮 高弘
	文化財課埋蔵文化財担当副主幹	矢部喜多夫
・報告書作成者	文化財課主事	加賀 淳一

第2章 周辺の環境と歴史

地理的環境

梅北北原遺跡は都城市梅北町に所在する。都城市は平成18年1月1日に周辺4町（旧高城町、旧高崎町、旧山田町、旧山之口町）と広域合併し、人口約17万人、面積約650平方kmの南九州の中核都市となった。都



1 : 梅北北原 2 : 王子原 3 : 天ヶ瀬 4 : 成山 5 : 池平城跡 6 : 六ヶ城跡 7 : 正応寺跡
8 : 城ヶ尾 9 : 宮田 10 : 高田 11 : 上ノ園第2 12 : 後半田 13 : 小鷹原

第1図 遺跡位置図 (S : 1 / 25000)

城市は東に鶴塚山系、西に霧島山系の山々に囲まれた盆地となっている。都城盆地は東西で2つの地形区分に分けることができ、西側に成層シラス台地が発達し、東側では扇状地地形が形成される特徴をもつ。本遺跡はこの都城盆地の中でも南東部に位置し、南東方向には金御岳（標高472m）や大野岡（標高552m）を中心とした大野岡山地が広がっている。その合間に小河川が流れ、盆地中央部の大淀川へと流れこんでいる。梅北原遺跡から東へ1.5km程行くと、金御岳山麓に端を発する安久川が流れ、北方で萩原川へと合流する。西方へ2km程離れたところには梅北川が流れている。

安久川周辺には開析扇状地が広がっており、梅北原遺跡はちょうど扇状地の中央に位置している。遺跡は扇状地の中でも微高地状に高くなっている場所に立地している。遺跡のすぐ北方には浅い谷地形が西から東へと入り込んでおり、現況は水田となっている。標高は約150mである。

歴史的環境

梅北原遺跡の周辺、東方に位置する成山遺跡では縄文時代後～晩期の集落が見つかっており、土器は西平式土器、中岳式土器等が検出されている。北方約3kmに位置する高田遺跡では弥生時代中期前半の集落が検出されている。入来II式期を主体とした集落で、集落を取り巻く溝状造構が検出されている。また中世の水田跡が検出されている。高田遺跡より西方に位置する後半田遺跡では中溝式、山ノ口II式を主体とする弥生時代中期後半の集落が検出されており、花弁状住居や周溝状造構が見つかっている。

北西に約2km離れた萩原川の南岸には天ヶ瀬遺跡があり、縄文時代早期の塞ノ神式土器、古代の遺構・遺物が検出されている。南部には、王子原遺跡、王子原第2遺跡がある。王子原遺跡では縄文後～晩期の遺構、遺物が検出されている。王子原第2遺跡では古代の掘立柱建物跡、中世の土坑墓が検出されている。さらに南部の梅北佐土原遺跡では縄文時代早期の落とし穴状遺構、集石遺構、遺物（別府原式土器、吉田式土器、下剥峯式土器等）が見つかっている。

市内南北地域（中郷地区）は古代以降、宗教色の強いエリアでもあり、仁安元年（1166）創建とされる正応寺、西正寺、興玉神社等がある。他にも周辺には南北朝期には築城され、以後一国一城令による廃城となるまで戦国期の舞台となった梅北城をはじめ、都城盆地では稀有な山城遺構をもつ六ヶ（村）城や池平城など山地形を利用して築かれた中世城館跡も点在している。

【引用・参考文献】

- 都城市教育委員会 1987 『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内南部）』都城市文化財調査報告書第6集 都城市教育委員会
- 都城市教育委員会 2004 『王子原第2遺跡』都城市文化財調査報告書第66集
- 都城市教育委員会 2005 『高田遺跡』都城市文化財調査報告書第70集 都城市教育委員会
- 都城市教育委員会 2007 『梅北佐土原遺跡』都城市文化財調査報告書第76集 都城市教育委員会
- 都城市教育委員会 2007 『後半田遺跡』都城市文化財調査報告書第77集 都城市教育委員会
- 都城市史編纂委員会（編） 1997 『都城市史 通史編 自然・原始・古代』都城市
- 都城市史編纂委員会（編） 2005 『都城市史 通史編 中世・近世』都城市
- 都城市史編纂委員会（編） 2006 『都城市史』資料編考古 都城市

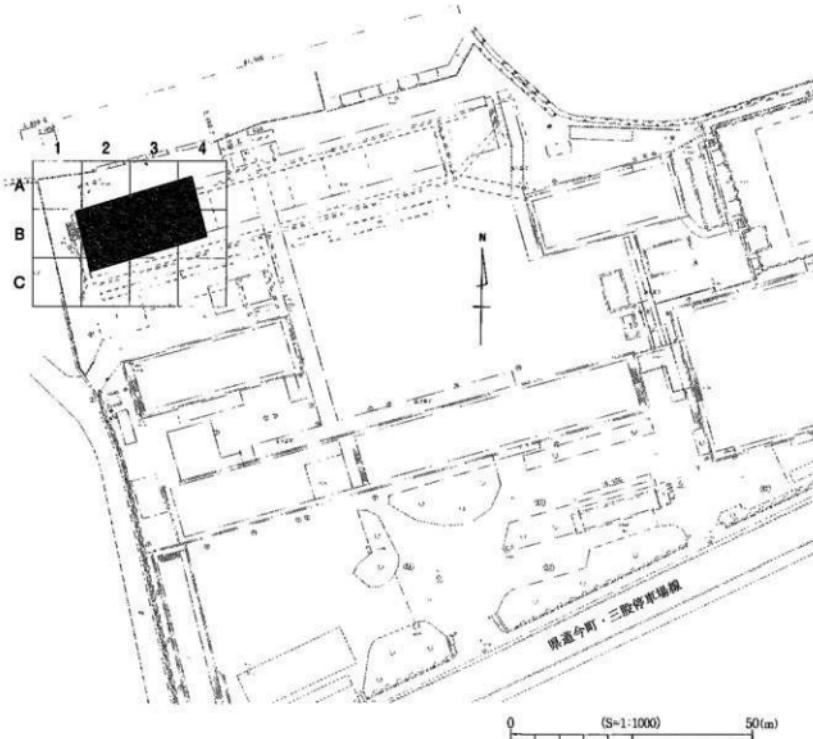
第3章 調査の成果

第1節 発掘調査の方法と概要

調査区の表土をバックホーで除去後、公共座標（世界測地系）によるSN杭を設置した。その後、公共座標をもとに10m×10mのグリッドを設定した（第2図）。調査区は旧校舎による擾乱がアカホヤ層（5層）まで及んでおり、上位層は大半が擾乱を受けていた。部分的に遺物包含層（8層）まで擾乱が及んでいたものの、5層以下ではほぼ良好な状態の堆積が見られた。

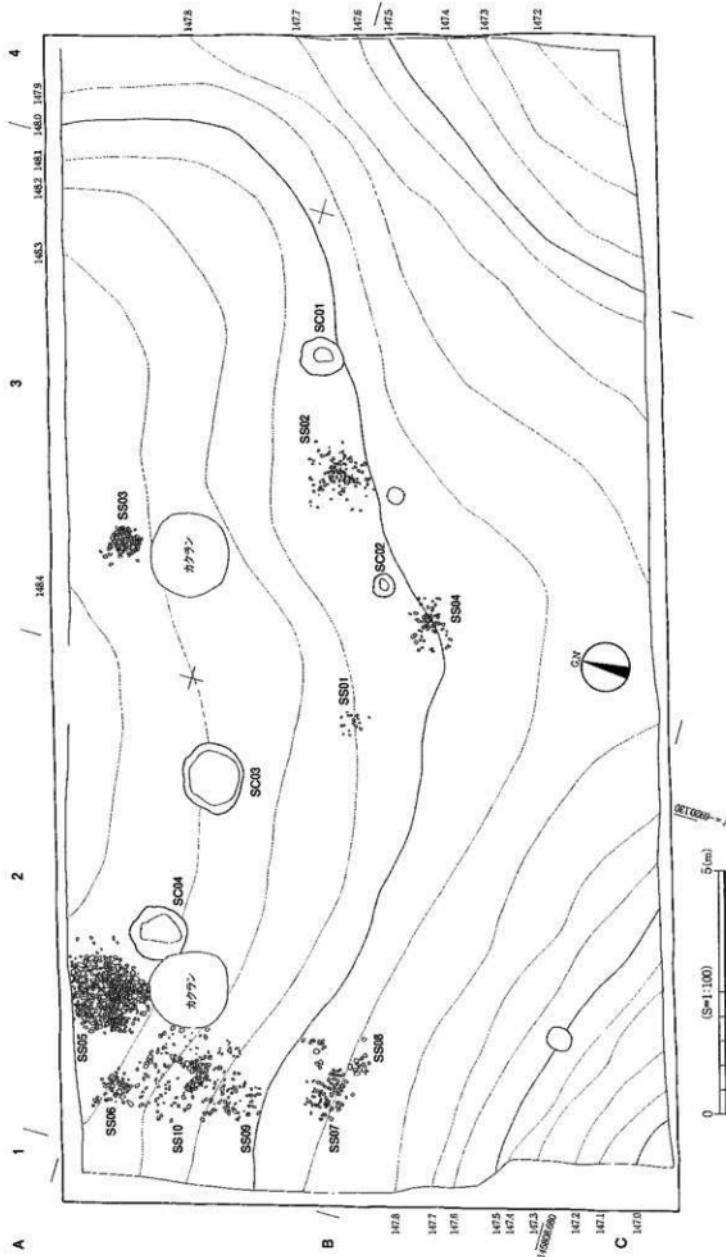
遺物包含層の掘り下げは人力によって行い、出土遺物の位置をトータルステーションにて記録後取り上げた。遺構精査及び検出は9層上面にて行った。検出後は適宜実測、写真撮影等記録保存の措置を講じた。調査終盤にはテフラ分析のための自然科学分析を実施した。調査終了後は調査区の埋め戻しを行い、すべての調査工程を終了した。

調査の結果、集石造構10基、土坑4基、その他ピットが検出された（第3図）。遺物は縄文土器（小牧3Aタイプ（吉田式土器）、下剥峯式土器、押型文土器）のほか剥片が検出された。



第2図 梅北北原トレーンチ配置図 (S=1/1000)

第3図 梅北北原道路構配図 ($S=1/100$)



第2節 梅北北原遺跡の基本層序（第4図）

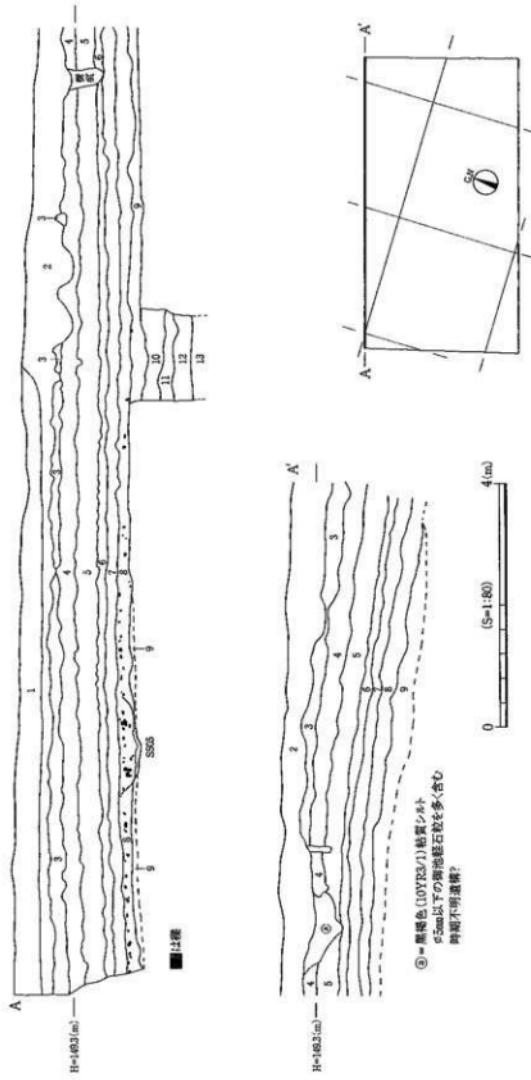
先述したように、本遺跡の大部分は旧校舎基礎工により5層まで搅乱を受けていた。ただし調査区の北壁付近では辛うじて基礎工部分が及んでおらず、プライマリーな土層堆積が確認できた。北壁断面および調査区南西隅をもとにした遺跡の基本層序は以下の通りである。なお、調査区の南西隅は緩い谷状に落ち込んでおり、遺物包含層である8層の下位より黄白色火山灰・桜島薩摩テフラP14（約11～12万年前）が部分的（ブロック状）に検出されている。

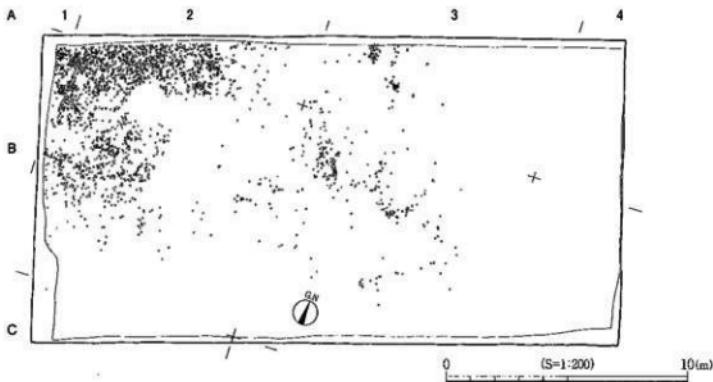
- 1層は黒褐色（10YR3/1）砂質土である。表土。
- 2層は褐灰色（10YR4/1）微砂質土である。旧校舎造成時の土と思われ、ガラスや鉄くずが多く含まれる。
- 3層は黒褐色（5YR3/1）砂質シルトである。直径1cm以下の浅黄橙色バミスを多く含んでいる。いわゆる「御池軽石（Kr-M）」を濃密に含む土壤化層である。
- 4層は黒色（10YR2/1）粘質シルトである。
- 5層は黄橙色ガラス質火山灰層である。いわゆる「鬼界アカホヤ火山灰層（K-Ah）」である。
- 6層は黒褐色（10YR3/1）粘質シルトで、直径1cm以下の黄橙色バミス（桜島P11）をまばらに含んでいる。
- 7層は黒褐色（10YR3/1）粘質シルトで、直径1cm以下の黄橙色バミス（桜島P11 Sz-11 約7500年前）を密に含み、褐色の軽石（霧島蒲生田スコリア Kr-Km 約7400～8300年前）を含んでいる。
- 8層は黒褐色（10YR3/1）粘質シルト、直径1cm以下の黄橙色バミス、白色バミスをごくわずかに含んでいる。本遺跡の遺物包含層である。
- 9層は黄褐色（10YR5/6）粘質シルトである。直径2mm以下の黄橙色バミスをわずかに含む。
- 10層は明黄褐色（10YR6/6）粘質シルトである。直径2mm以下の黄橙色バミスをごくわずかに含む。
- 11層は明黄褐色（2.5Y7/6）微砂質シルトである。直径5cm以下のAT（シラス）ブロックをわずかに含む。
- 12層は明黄褐色（2.5Y7/6）微砂質シルトである。直径5cm以下のATブロック、黄橙色バミス、米粒大の炭化物をまんべんなく含む。姶良入戸火碎流堆積物であるが二次堆積層の可能性もある。
- 13層はAT、姶良入戸火碎流堆積物。本遺跡の層は橙色系の色調を呈している。



第4図 梅北北原遺跡基本土層模式図

第5図 調査区北壁土層断面図 (S=1/80)





第6図 8層上面礫群平面分布図 ($S=1/200$)

第3節 繩文時代の遺構

集石遺構 (SS) (第7図～第9図)

本調査区では計10基の集石遺構が検出された。9層上面での検出となつたが、8層掘り下げ当初より調査区の北西部を中心に散礫が高密度で検出されている(第6図)。それらの位置をトータルステーションにて記録後取り上げ(約2500点)、その後最終的な礫分布のまとまりから集石遺構検出へと至った。

9層上面の地形面をみると、旧地形は丘陵の先端状になつてゐるようであり、調査区の南西隅、南東隅に向けて地形傾斜が認められる。集石遺構はこの傾斜面に構築されており、調査区の西半を中心で検出されている。各集石の礫はその大半が被熱し、石材は砂岩によって構成されていた。

1号集石遺構 (SS01) (第7図)

調査区中央(B 2区)で検出された。プランは 0.6×0.5 (m)で、本遺跡で検出された集石遺構の中では一番小型である。構成礫の総数は18個を数え、18個とも角礫であった。礫のほとんどが被熱、赤変しており、炭化物の付着している礫が4点見られた。構成礫の重量は、総重量が1383g(1.3kg)を量り、最大のもので230g、最小は10gである。

集石の掘込は礫取上げ後、8層下部にて確認できた。深度は検出面から約10cmで浅い。埋土は8層を基本としており、中には米粒大的炭化物が含まれていた。遺物は検出されなかった。

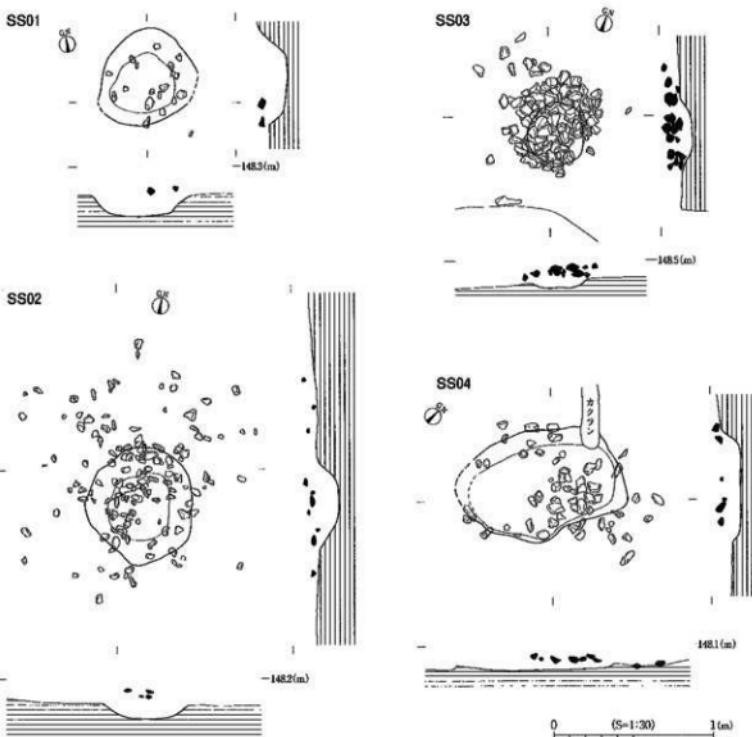
2号集石遺構 (SS02) (第7図)

調査区中央(B 3区)で検出された。構成礫は137個、そのほとんどが角礫である。かなり散在しており、使用時の状態は留めていないものと考えられる。構成礫の総重量は7775g(7.8kg)、最大の礫は188gで、最小のものは9gである。ほとんどの礫が被熱、赤変していた。炭化物の付着している礫は32点見られた。

掘込は礫取り上げ後に確認できた。プランは 0.7×0.6 (m)で深度は検出面から20cmを測る。埋土は8層を基本としており、埋土中には米粒大的炭化物が含まれていた。遺物は検出されなかった。

3号集石遺構 (SS03) (第7図)

調査区北壁際(A 3区)で検出された。プランは 0.6×0.6 (m)と小形である。構成礫は総数145個あり、やや密な状態で検出され、ほぼ正円形に配置されている。ほとんどが角礫であり、被熱によって赤変している。



第7図 SS01・SS02・SS03・SS04実測図 ($S=1/30$)

炭化物の付着している礫は29点見られた。構成礫の総重量は18071 g (18kg)、最大のものは455 g、最小のものは8.4 g を量る。重量の平均値は124.6 g である。

掘込は礫取り上げ後確認できた。プランは $0.4 \times 0.3(m)$ 、掘込も深度が10cm程度で浅い。埋土は8層を基本とし、中には米粒大の炭化物が混入していた。遺物は検出されなかった。

4号集石遺構 (SS04) (第7図)

調査区中央 (B 3 区) で検出された。プランは $0.8 \times 0.5(m)$ である。構成礫は総数が57個、総重量は6048 g (6 kg)である。礫は最大で330 g、最小は15 g、礫の平均重量は106 g である。ほとんどの礫が被熱によつて赤変しており、炭化物の付着した礫は9個である。円形に配された礫の周囲に、西方向に散るような形で構成礫が検出されており、使用後の状態を示しているものと思われる。

掘込は礫取り上げ後確認できた。プランは $1.0 \times 0.5(m)$ で深度は検出面から10cm未満で極めて浅い。遺物は検出されなかった。

5号集石遺構 (SS05) (第8図)

調査区北壁際 (A 2、B 2 区) において検出された。プランは $1.5(+a) \times 1.6(m)$ で $1/4$ 程度は調査区外にかかっており、全体を検出できていない。礫総数は818個で構成礫の総重量は193231 g (193kg)である。

最大で5600 g、最小は 9 g である。礫の平均重量は236 g を量る。ほとんどの礫が被熱によって赤変しており、また、炭化物の付着した礫は208点検出された。これら礫の中から剥片(5)が1点検出されている。

掘込はプランが $1.8 \times 1.6 (+ a)$ (m)である。中央部が段落ち状に窪んでおり、深度は検出面から約50cmある。埋土は8層を基本とし、多量の炭化物が含まれていた。この一部をサンプルとして放射性炭素年代測定分析(AMS法)を実施した。その結果、BP8370±60の数値が得られている(第4章参照)。

その他遺物は検出されなかった。

6号集石遺構 (SS06) (第8図)

SS06の西方1 mにおいて検出された。プランは 0.8×0.7 (m)である。総礫数は57個である。総重量は7384 g(7.3kg)であり、最大のものは600 g、最小のものは131 gである。平均値は1295 gである。ほとんどの礫が被熱、赤変しており、炭化物の付着した礫は6個検出された。

掘込は礫取り上げ後、確認できた。プランは梢円形を呈するが、調査時の不手際により全体を検出することができなかつた。

遺物は集石礫の直上から土器片(3)が検出されている。遺構内からの出土ではないため、これがSS06に直接伴うものかは疑問が残る。

7号集石遺構 (SS07) (第8図)

プランは 1.0×0.7 (m)であるが各礫とも散在しており、使用時の状態ではないと考えられる。構成礫の総数は95個で、総重量は10212 g(10.2kg)である。最大のものは550 g、最小のものは26.4 gを量る。礫の平均重量は107.5 gである。礫は被熱、赤変が認められ、そのうち炭化物の付着が認められるものは16個検出された。

掘込のプランは 0.9×0.9 (m)ではほぼ正円形に近い。深度は検出面から約10cm程度で浅い。遺物は検出されなかつた。

8号集石遺構 (SS08) (第8図)

プランは 0.5×0.4 (m)で小型である。人頭大の礫が配置されていた。構成礫の総数は15個、総重量は4147 g(4.1kg)を量る。礫は最大で1020 g、最小で30 gである。礫の平均重量は276.5 gである。すべて角礫で構成されている。ほとんどの礫が被熱によって赤変していた。炭化物の付着した礫は1個検出されたのみである。

集石の下からは掘込は検出されず、SS08は掘込を持たなかつたものと考えられる。遺物は検出されなかつた。

9号集石遺構 (SS09) (第9図)

SS09とSS10は切合い関係にあり、SS09はSS10に切られている。構成礫は使用後のものと思われ、散在していた。礫はほとんどが被熱、赤変しており、炭化物が付着している礫が11個見られた。ほとんどが角礫である。

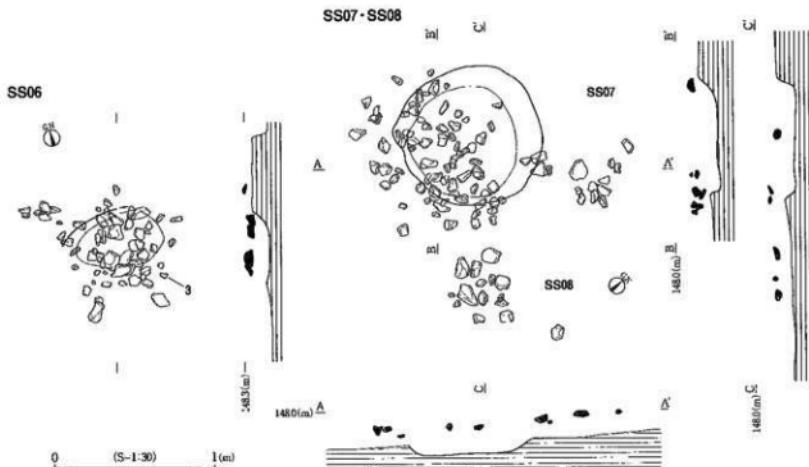
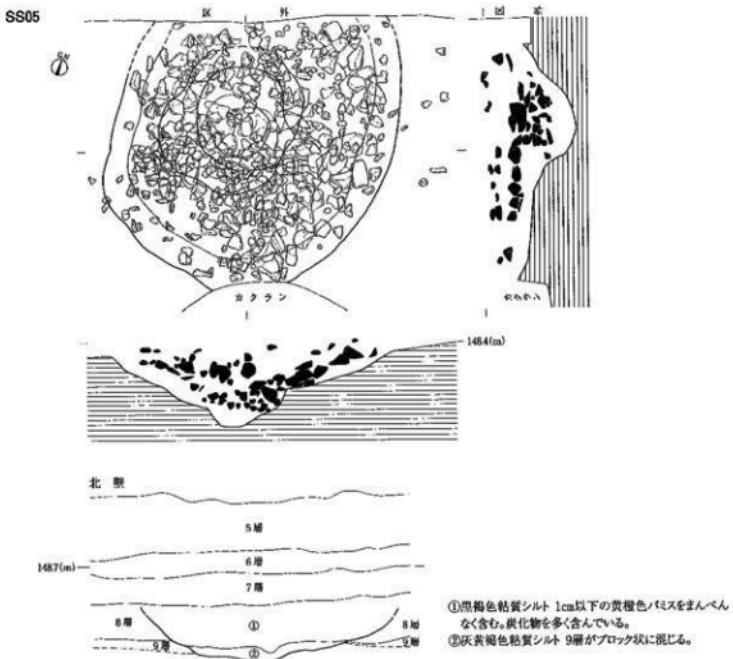
掘込はプランか $0.9 \times 0.5 (+ a)$ mである。深度は検出面から10cm未満で浅い。遺物は検出されなかつた。

10号集石遺構 (SS10) (第9図)

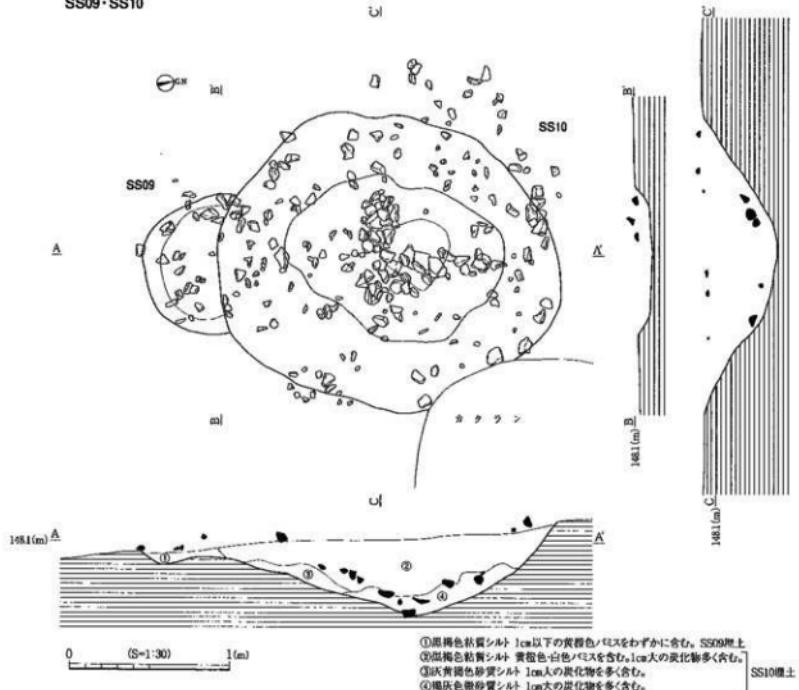
SS09を切っている。プランは 2.3×2.1 (m)。構成礫総数は350個で、礫の総重量は41917 g(41.9kg)で、最大のものが2020 g、最小のもので11 gを量る。礫の平均重量は118.6 gである。

ほとんどが角礫によって構成されており、被熱による赤変が認められた。その内、76個の礫に炭化物の付着が認められた。底面に向かうにつれ礫の密度は高くなっていき、最下層付近では人頭大の礫が検出された。

掘込のプランは 2.1×1.9 (m)である。断面形はすり鉢状になっており、深度は検出面から最大で50cmを測る。平面・深度の規模はSS05の掘込に近い。埋土は8層を基本とした黒褐色土で、下層はやや砂質になっている状況が見て取れた。また埋土中には多くの炭化物が含まれていた。遺物は検出されなかつた。



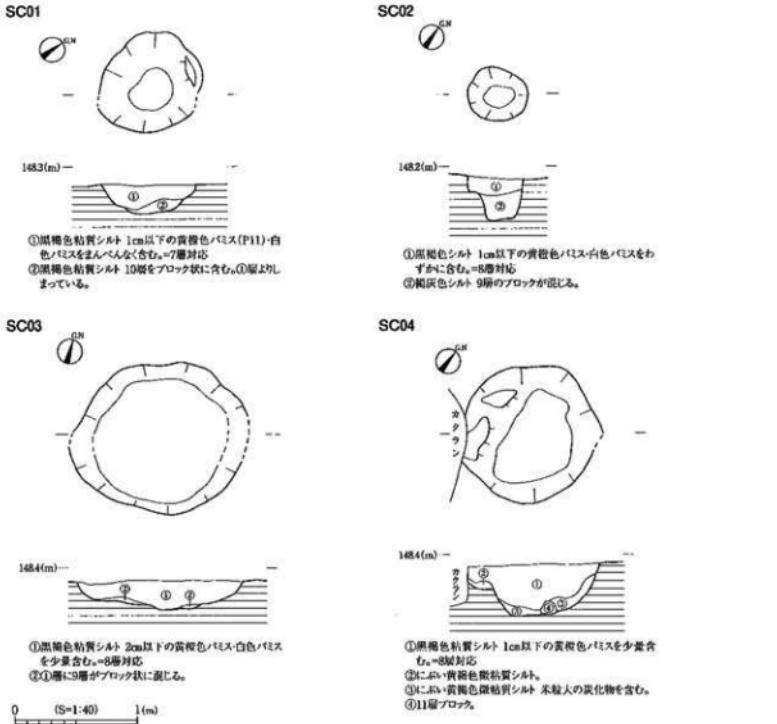
第8図 SS05・SS06・SS07・SS08実測図 (S=1/30)



第9図 SS09・SS10実測図 (S=1/30)

第1表 梅北北原遺跡集石遺構一覧

No.	プラン (縦の範囲)・(m)	面積数 (個)	標重重量 (g)	標密度	炭化物の有無	掘込の有無	掘込の深度 (cm)	備考
1号集石遺構	0.6×0.5	18	1383	粗	○	○	10	
2号集石遺構	-	137	7775	粗	○	○	20	
3号集石遺構	0.6×0.6	145	18071	密	○	○	10	
4号集石遺構	0.8×0.5	57	6048	粗	○	○	10未満	
5号集石遺構	1.5(+a)×1.6	818	193231	密	○	○	50	¹⁴ C年代測定 BP8370±60
6号集石遺構	0.8×0.7	57	7384	粗	○	○	-	小牧3Aタイプ(3)
7号集石遺構	1.0×0.7	95	10212	粗	○	○	10未満	
8号集石遺構	0.5×0.4	15	4147	粗	×	×	-	
9号集石遺構	-	-	-	粗	○	○	10未満	
10号集石遺構	2.3×2.1	-	-	粗	○	○	50	



第10図 土坑(SC)実測図 (S=1/40)

土坑 (SC) (第9図)

本遺跡では土坑が4基検出された。埋土中に礫を含んでいるものも見られ、集石遺構の範疇に含まれる可能性があるものもあるが、ここでは土坑として報告する。

SC01 (第9図)

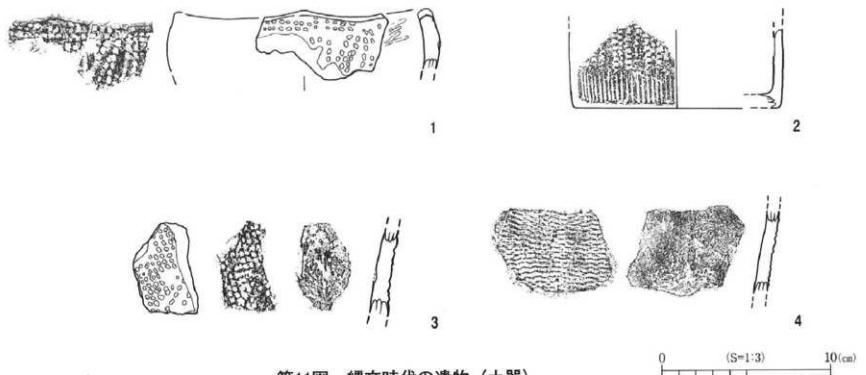
プランは $0.6 \times 0.6(m)$ の梢円形である。深度は検出面から最大で20cmを測る。埋土は黒褐色土を基本とし、PIIと思われる黄褐色バミスが多く混入していた。出土遺物はない。

SC02 (第9図)

SS04の北で検出された。プランは $0.4 \times 0.3(m)$ 。深度は検出面から最大で30cmである。埋土はやや明るめの黒褐色土で、8層に対応するものである。出土遺物はない。

SC03 (第9図)

プランは $1.5 \times 1.5(m)$ 。深度は検出面から最大で25cmを測る。埋土はやや明るめの黒褐色土で8層に対応するものである。底面付近では9層のブロックが埋土中に混入していた。少量の礫が混入していたが、その

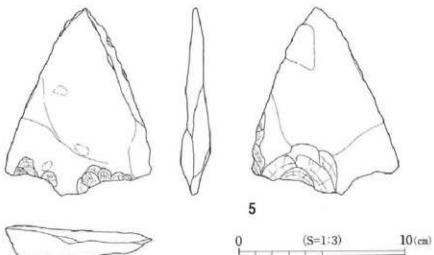


第11図 縄文時代の遺物（土器）

他の出土遺物はない。

SC04（第9図）

SS05のすぐ南東で検出された。プランは1.2×1.2(m)を呈する。掘込の西側ではステップ状になっている。埋土はやや明るめの黒褐色土で、8層に対応している。埋土中には砾が数点混入していた。底面付近では少量の炭化物を含んでおり、本来は集石遺構として使用された土坑であった可能性が高い。少量の砾の他には遺物の出土は見られなかった。



第12図 SS05出土剥片

第4節 縄文時代の遺物

土器（第11図）

本遺跡では縄文時代早期の集石遺構等が検出されているものの、遺物の検出は極端に少なく、該期の土器はわずかに4点を数えるのみであった。土器は小牧3Aタイプもしくは吉田式土器、下剥峯式土器、押型文土器（山形）が検出された。いずれも8層から検出されている。

1は口縁～胸部である。遺跡範囲確認調査時に検出された。口径は15.2cmで小型品であろうか。口縁部は緩やかな波状を呈しており、口縁断面形は内湾する。口縁端は丸くおさめられている。外面には貝殻刺突文が施され、口縁端付近では横位に、それよりも下位では斜位に施される。内面はミガキが施される。色調は全体的にぶい褐色を呈しており、焼成が甘く、脆弱である。下剥峯式土器に該当しよう。
2は底部である。SS07の東1mで検出された。外形はやや直立ぎみに立ち上がる。底径は12cmほどである。外面には縦位の貝殻刺突文が施され、その下位の底部据には縦位の条痕が施される。色調は橙色系の明るめの色調に発色しており、焼成も良好である。小牧3Aタイプと思われる。

3は底部付近と考えられる資料である。SS06の直上で検出された。器形はやや外反する。外面には斜位の貝殻刺突文が施されている。反転した施文もなされており、「V」字状に施文されていたものと思われる。色調は明るい橙色に発色している。型式認定に苦しむ資料であり、刺突文は下剥峯式の特長にも似るがかな



第13図 その他の遺物

り密接に施されている。また土器胎土、色調も先の1とは異なる。これらを勘案して、ここでは小牧3Aタイプとして報告しておく。4は押型文土器の胴部である。円筒形の深鉢である。外反度や器壁の厚さから底部に近い部位と考えられる。山形押型文が横方向に施されている。色調は浅黄褐色に発色し、胎土中にはカクセン石の混入が認められる。

石器類（第12図）

石器類は本調査では検出されず、石器加工に伴う剥片、チップ等も検出されなかった。SS05より二次加工剥片（5）が1点検出されたのみである。扁平な礫を加工し、側縁部及び下端に刃部を作出している。石材は安山岩とみられ、被熱により赤化している。また被熱時に付着したとみられる炭化物が認められる。

その他の遺物（第13図）

今回の調査では旧校舎のカクラン土（1層）からも遺物が検出されている。検出されたのは弥生土器と古代の土師器杯である。このことから3層（御池軽石層）より上層においても該期の遺跡が形成されていた可能性が高い。

6は弥生時代中期の甕の口縁部である。復元口径は14.2cmで小型である。口縁部は貼付のものが斜めへ立ち上がる。内面には斜位のハケが施される。胎土中にキンウンモを含んでいる。山ノ口II式に該当する資料である。

7は甕底部である。底面は欠落しているが、凸レンズ状になっていたものと推定される。外面にはミガキが部分的に残り、沈線状の工具痕も残っている。胎土の特徴は6と類似しておりこの時期の所産の可能性がある。

8は杯底部である。底径は約5cmである。底面はほとんど残存しないもののヘラ切りによる切り離しが確認できる。胎土・切り離しの技法から古代の所産と考えられるが、破片であるため具体的年代は不明である。

第2表 梅北原遺跡土器観察表

No.	出土区	出土層	器種	文様・器面調整等	色・面	胎土含有鉱物等	備考
1	B-2 試掘Tr	8	深鉢	外面:貝殻刺突 内面:ミガキ	外面:にごい緑(75YR5/4) 内面:にごい・黄緑(10YR5/3)	半透明・白色・赤褐色	下剥離式
2	B-2	8	深鉢	外面:貝殻刺突 条痕 内面:-	外面:緑(75YR7/6) 内面:緑(75YR7/6)	透明・半透明・白色・褐色	小牧3Aタイプ
3	SS06直上	8	深鉢	外面:貝殻刺突 内面:ナデ	外面:緑(5YR7/8) 内面:浅黄緑(10YR8/3)	透明・白色・黒色	小牧3Aタイプ
4	C-2	8	深鉢	外面:押型文(山形) 内面:ナデ	外面:浅黄緑(75YR7/6) 内面:灰白(10YR8/2)	透明・白色・褐色・カクセン石	円筒平底?
6	-	1	甕	外面:ナデ 内面:ハケ	外面:にごい・赤褐色(25YR5/4) 内面:緑(25YR6/6)	半透明・白色・キンウンモ	山ノ口II式
7	-	1	甕	外面:ミガキ 内面:ナデ	外面:明赤褐色(25YR5/6) 内面:緑(5YR6/6)	半透明・白色・キンウンモ	
8	-	1	杯	外面:底部ヘラ切り 内面:ロクロナデ	外面:浅黄緑(75YR8/4) 内面:75YR8/4	黒色	

第4章 自然科学分析

都城市教育委員会、梅北北原遺跡発掘調査に係る自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 梅北北原遺跡の土層とテフラ

1.はじめに

南九州地方に位置する都城市域には、姶良、鬼界、阿多、池田などのカルデラ火山のほか、霧島や桜島など成層火山の噴火に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く分布している（たとえば早田、2006）。これらのテフラの中には、すでに層位や噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、それとの層位関係を遺跡で求めることによって、遺構や遺物包含層の層位や年代に関する資料を収集できるようになっている。

そこで、テフラが認められた梅北北原遺跡の発掘調査区においても、現地で調査を行って土層層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を合わせて行い、指標テフラの検出同定を実施して、土層や遺物包含層の層位や年代に関する資料を求めるこになつた。調査分析の対象となつた地点は、調査区の北壁、南西隅、北東隅の3地点である。

2. 土層の層序

(1) 調査区北壁

調査区北壁では、下位より黄色軽石を含みやや桃色がかった黄色火砕流堆積物（層厚3cm以上、軽石の最大径23mm、X III層）、黄色火砕流堆積物（層厚27cm、軽石の最大径51mm、X II層）、黄色軽石混じり黄灰色砂質土（層厚17cm、軽石の最大径26mm、X I層）、黄色軽石混じり褐色土（層厚8cm、軽石の最大径11mm）、灰色がかった褐色土（層厚16cm、以上X層）、橙色軽石混じり灰褐色土（層厚21cm、軽石の最大径11mm、IX層）、白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土（層厚22cm、8層）、黄色軽石に富む褐色スコリアを少量含む暗灰褐色土（層厚21cm、軽石の最大径11mm、スコリアの最大径2mm、VII層）、黒灰褐色土（層厚10cm、VI層）、成層したテフラ層（層厚34cm、V層）、灰褐色土（層厚7cm）、黒色土（層厚23cm、以上IV層）、黄色細粒軽石に富む黑褐色土（層厚22cm、軽石の最大径4mm、III層）、暗灰色土（層厚21cm、II層）、盛土（層厚17cm、I層）が認められる。

これらのうち、X III層およびX II層の火砕流堆積物については、層位や層相から、約2.4～2.5万年前¹に姶良カルデラから噴出した姶良入戸火砕流堆積物（A-Ito、荒牧、1969、町田・新井、1992など）に同定される。またV層の成層したテフラ層は、下部の黄色軽石層（層厚6cm、軽石の最大径6mm）と、上部の正の級化構造をもつ橙色砂質細粒火山灰層（層厚28cm）からなる。このテフラ層は、層相から約6,300年前¹に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰層（K-Ah、町田・新井、1978）に同定される。またIII層に多く含まれる細粒の黄色軽石については、層位や岩相などから、約4,200年前¹に霧島火山御池火口から噴出した霧島御池テフラ（Kr-M、町田・新井、1992、奥野、1996）に由来すると考えられる。発掘調査では、8層から縄文時代早期の遺物が検出されている。

(2) 調査区南西隅

調査区南西隅では、下位より黒褐色土（層厚7cm以上）、橙色細粒火山灰層（層厚6cm）、黄灰色土（層厚6cm）、上半部に黄橙色軽石（最大径21mm）を含む黒褐色土（層厚34cm）、暗褐色土（層厚28cm）、褐色スコリア混じりで黄色軽石に富む暗灰褐色土（層厚26cm、軽石の最大径12mm、スコリアの最大径2mm）、黒色土（層厚7cm）、黒褐色土（層厚3cm）、成層したテフラ層（層厚37cm）、黄灰色土（層厚7cm）、黒色土（層厚10cm

以上)が認められる。

これらのうち、橙色細粒火山灰層については、層位や層相から約1.1~12万年前¹⁾に桜島火山から噴出した桜島薩摩テフラ(Sz-S、小林、1986、奥野、1996)に同定される。また成層したテフラ層は、下位より黄褐色粗粒火山灰層(層厚2cm)、褐色火山豆石混じり黄褐色軽石層(層厚4cm、軽石の最大径14mm、火山豆石の最大径5mm)、正の級化構造をもつ橙色砂質細粒火山灰層(層厚31cm)からなる。このテフラ層は、層位や層相などからK-Ahに同定される。

(3) 調査区北東隅

調査区北東隅では、K-Ahの上位に、下位より灰褐色土(層厚6cm)、黒色土(層厚24cm)、細粒の黄色軽石層(層厚21cm、軽石の最大径12mm、石質岩片の最大径2mm)、黄色細粒軽石に富む暗褐色土(層厚23cm、軽石の最大径6mm)、黄色細粒軽石混じり黒褐色土(層厚22cm、軽石の最大径3mm)、黒色土(層厚13cm)、黄白色軽石層(層厚11cm、軽石の最大径16mm、石質岩片の最大径2mm)、灰褐色表土(層厚13cm)が認められる。

これらのうち、細粒の黄色軽石層については、層位や岩相などからKr-Mに同定される。またその上位の黄白色軽石層については、層位や層相などから、1470年代に桜島火山から噴出したと考えられている桜島3(Sz-3、小林、1986、重永、1991、町田・新井、1992、早田、2006など)同定されよう。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

調査区北壁において採取された試料のうち、試料1'、試料2、試料3'、試料5の4点について、テフラ検出分析を行い、含まれるテフラ粒子の定性的な特徴の把握を行った。分析の手順は次のとおりである。

1) 試料8gを秤量。

2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。

3) 80°Cで恒温乾燥。

4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。いずれの試料からも、軽石やスコリアなどの比較的粗粒な粒子は検出されなかった。試料5には、透明、淡褐色、褐色のバブル型ガラスや軽石型ガラスが多く含まれている。試料3'および試料2には、透明、淡褐色、褐色のバブル型ガラスや軽石型ガラス、さらにスポンジ状に発泡した白色の軽石型ガラスが認められる。試料1には、スポンジ状に発泡した黄白色の軽石型ガラスのほか、透明や淡褐色のバブル型ガラスも含まれている。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と方法

テフラ検出分析の対象となった調査区北壁の4試料を対象に、含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率装置(京都フィッシュン・トラック社製RIMS2000)により屈折率(n)の測定を行って、指標テフラとの同定精度の向上を図った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。調査区北壁の試料5に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.498~1.500である。試料3'と試料2に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、各々1.499~1.501と1.498~1.501である。試料1'に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.508~1.516である。

5. 考察

テフラ検出分析および火山ガラスの屈折率測定の対象となった試料のうち、試料1'（VII層）に含まれる火山ガラスの一部の屈折率は、その特徴から約7,500年前¹⁾に桜島火山から噴出した桜島11テフラ（Sz-11, n : 1,513-1,517, 小林, 1986, 町田・新井, 1992, 2003, 奥野ほか, 2000）のそれと重なる。したがって、層位や層相も合わせて考慮すると、本試料中にはSz-11が混在していると考えられる。このことから、VII層に混在している褐色の軽石については、層位や岩相などから、層位関係は不明であるものの、Sz-11とはほぼ同時期の約7,400-8,300年前¹⁾に霧島火山から噴出した霧島蒲牟田スコリア（Kr-Km, 井ノ上, 1988, 早田, 1997）に由来すると考えられる。

他の試料の中では、試料3'（IX層）と試料2（8層）にスponジ状に発泡した白色の軽石型ガラスが少量ながら認められた。また試料5（X層下部）と試料3'には、土層断面観察により最大径が1mm程度の軽石粒子が認められている。試料からは、これらの比率が低いことや残存状況の関係で屈折率測定では検出されなかったようであるが、これらの試料にSz-S起源のテフラ粒子が混在している可能性が考えられる。

なお、桜島火山起源のテフラについては、まだ屈折率測定例がさほど多くない状況があり、詳細についてはまだ不明な点があるが、屈折率を考慮すると、試料1'を除いて、測定された軽石型ガラスの多くはATに由来するように思われる。

以上のことから、縄文時代早期の遺物が検出されている8層については、Sz-11およびKr-Kmより下位にあり、Sz-Sより上位にあると推定される。このことは、後述する8層中の炭化物の放射性炭素(¹⁴C)年代値(8370±60年BP: Beta-224911)とも矛盾しない。

6. まとめ

梅北北原遺跡において、土層観察およびテフラ検出分析と屈折率測定を行った。その結果、下位より始良入戸火碎流堆積物（A-Ito, 約2.4-2.5万年前¹⁾）、桜島薩摩テフラ（Sz-S, 約1.1-1.2万年前¹⁾）、桜島11テフラ（Sz-11, 約7,500年前¹⁾）および霧島蒲牟田スコリア（Kr-KmS, 約7,400-8,300年前¹⁾）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 約6,300年前¹⁾）、霧島御池テフラ（Kr-M, 約4,200年前¹⁾）、桜島3テフラ（Sz-3, 1470年代）などを検出することができた。本遺跡で検出された縄文時代早期の遺物包含層については、おそらくSz-Sの上位で、Sz-11およびKr-KmSより下位にあると考えられる。

*1: 放射性炭素(¹⁴C)年代。暦年較正年代との関係を表3に示す。

文献

- 荒牧重雄（1969）鹿児島県国分地域の地質と火碎流堆積物。地質雑誌, 75, p.425-442。
池田晃子・奥野充・中村俊夫・小林哲夫（1995）南九州、始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火碎流中の炭化樹木の加速器¹⁴C年代。第四紀研究, 34, p.377-379。
井ノ上幸造（1988）霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史。岩鉱, 83, p.26-41。
小林哲夫（1986）桜島火山の形成史と火碎流。文部省科研費自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流（火碎流等）の特質と災害」（研究代表者 荒牧重雄）, p.137-163。
町田洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－始良Tn火山灰の発見とその意義－。科学, 46, p.339-347。
町田洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, p.143-163。
町田洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
町田洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス。東京大学出版会, 336p.
松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）始良Tn火山灰（AT）の¹⁴C年代。第四紀研究, 26, p.79-83。
奥野充（1996）南九州の第四紀末テフラの加速器¹⁴C年代（予報）。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, VII, p.89-116.

- 奥野充・福島大輔・小林哲夫 (2000) 南九州のテフロクロノロジー－最近10万年間のテフラ－、人類史研究－、12、p.9-23。
- 奥野充 (2002) 南九州に分布する最近3万年間のテフラの年代学的研究、第四紀研究、41、p.311-316。
- 重永卓爾 (1991) 桜島に起源を有する文明 Tephra の年次について、都城市教育委員会編「大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書」、p.59-61。
- 早田勉 (1997) 風土と自然環境、宮崎県編「宮崎県史通史編」、1、p.3-77。
- 早田勉 (2006) 都城盆地とその周辺に分布するテフラ(火山灰)、都城市編さん委員会編「都城市史資料編」、考古、p.609-629。

第3表 テフラ検出分析結果

地 点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
調査区北壁	1'	-	-	-	++	pm, bw	黄白, 透明, 淡褐
	2	-	-	-	++	bw, pm	透明, 淡褐, 褐, 白
	3'	-	-	-	++	bw, pm	透明, 淡褐, 褐, 白
	5	-	-	-	+++	bw, pm	透明, 淡褐, 褐

++++ : とくに多い, +++ : 多い, ++ : 中程度, + : 少ない、最大径の単位はmm.

bw : バブル型, pm : 軽石型.

第4表 屈折率測定結果

地 点	試料	測定対象	火山ガラス(n)
調査区北壁	1'	軽石型ガラス	1.508-1.516
	2	軽石型ガラス	1.498-1.501
	3'	軽石型ガラス	1.499-1.501
	5	軽石型ガラス	1.498-1.500

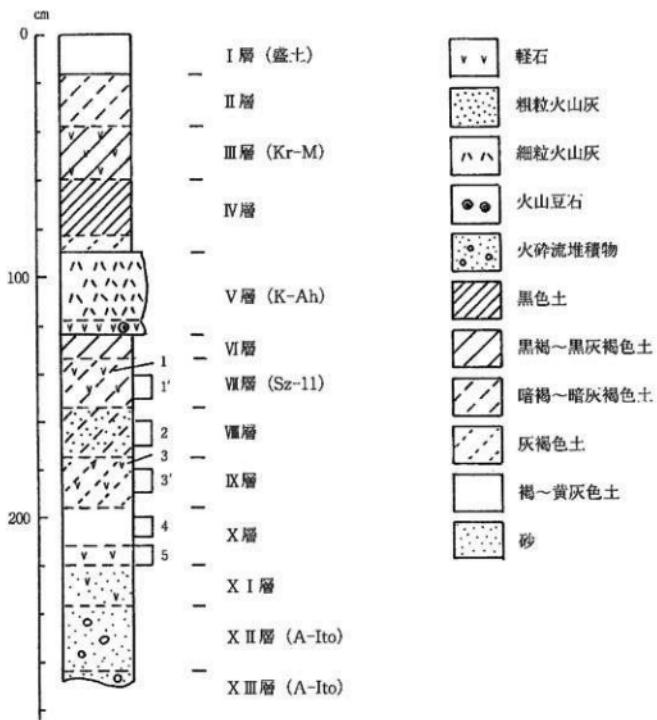
屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定法（RIMS2000）による。

第5表 梅北北原遺跡に関係するテフラの放射性炭素 (^{14}C) 年代と歴年較正年代

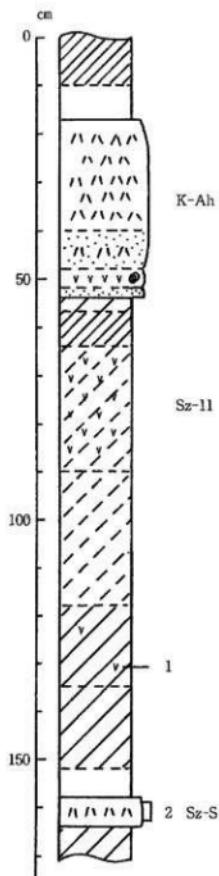
テフラ	放射性炭素年代(^{14}C)*1	歴年較正年代*2
霧島御池 (Kr-M)	4.2	4.6
鬼界アカホヤ (K-Ah)	6.3	7.3
霧島牛のすね下部 (Kr-USL)	6.3~6.5	7.3~7.6
桜島11 (Sz-11)	7.5	8.0
桜島12 (Sz-12)	8.0	9.0
桜島13 (Sz-13)	9.4	10.6
桜島薩摩 (Sz-S)	11~12	12.8
姶良入戸 (A-Ito)	24~25	26~29

*1 : 単位は、kyBP. (1,000年前：西暦1950年より).

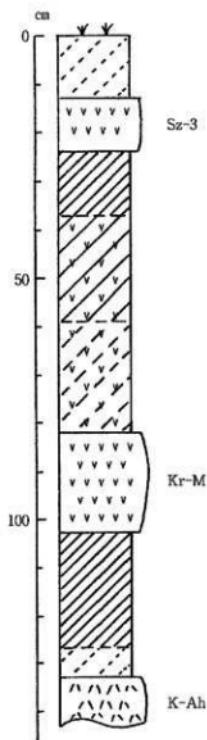
*2 : 単位はka (1,000年前：現在より). 早田 (2006) をもとに作成.



第14図 梅北北原遺跡の土層柱状図①（数字はテフラ分析の試料番号）



調査区南西隅



調査区北東隅

第15図 梅北北原遺跡の土層柱状模式図②（数字はテフラ分析の資料番号）

II. 梅北北原遺跡における放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(^{14}C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により ^{14}C 年代から曆年代に較正する必要がある。

2. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	8層集石遺構(SS05)	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

3. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	未補正 ^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	曆年代Calendar Age (1σ : 68%確率, 2σ : 95%確率)
No.1	224911	8380 ± 60	-25.6	8370 ± 60	交点: cal BC 7480 1σ : cal BC 7520~7360 2σ : cal BC 7550~7310

BP: Before Physics (Present), cal: calibrated, BC: 紀元前

(1) 未補正 ^{14}C 年代

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いて計算している。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(3) ^{14}C 年代

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

(4) 曆年代 (Calendar Age)

^{14}C 年代を実際の年代（曆年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正する必要がある。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

曆年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の曆年代値を意味する。 1σ (68%確率)と 2σ (95%確率)は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

4. 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、8層集石遺構（SS05）の炭化物では8370±60年BP（ 1σ の暦年代でBC7520～7360年）の年代値が得られた。

文献

- Paula J Reimer et al. (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26–0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029–1058.
- 尾崎大真 (2005) INTCAL98からIntCal04へ. 学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo3－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－, p.14–15.
- 中村俊夫 (1999) 放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1–3

第5章 まとめ

梅北北原遺跡の調査では縄文時代早期の遺構、遺物が検出された。ここでは今回の調査成果についてまとめておきたい。

遺跡の時期（出土土器について）

まず、遺跡の時期についてであるが、検出された土器には小牧3Aタイプ（もしくは吉田式）、下剥峯式、押型文の3型式が認められた。これらのうち、2・3を型式認定に苦慮する資料ではあるが、小牧3Aタイプとして報告した。小牧3Aタイプは前追亮一氏によって板称された土器型式であり、吉田式の前段階に位置づけられている（根占町教育委員会2000）。現在のところ、小牧3Aタイプそのものが独立一型式として確立している状況はないが、他に類する型式が無いためここでは報告した（注1）。

小牧3Aタイプに続くとされる吉田式、それ以降の石坂式は出土しておらず、遺跡の使用時期にはある程度の時間幅が想定できる。南九州の現行編年（黒川2002）に対照させたならば、概ね縄文時代早期前葉～中葉の時間幅に位置づけることができよう。また、近年、南九州における押型文土器の出現は別府原式段階に位置づけられることが示されており（上杉2006）、本遺跡で検出された押型文土器（4）は下剥峯式（1）に伴う段階の所産として位置づけることも可能であろう。調査区全体での出土量が乏しいため、土体となる型式や遺跡の消長は不明である。

集石遺構

今回の調査では集石遺構が合計10基検出された。地形面は概ね北から南への緩やかな傾斜が認められ、各集石遺構は緩い傾斜面に構築されていたことが分かる。分布を見てみると、調査区の北西隅には大型のSS05やSS09などが認められる。被熱した散疊もこの範囲で集中的に検出されており、使用頻度の高さを窺え、長期の使用があったものと推定できる。

SS08以外は掘込を持つタイプの集石遺構であり、その中でも最大のものはSS05（プラン： $1.5 \times 1.6(m)$ ）疊総重量：193,231(g)である。掘込も中央部が段落ち状に深くなる構造を持っている。その他の集石遺構についても、SS02、SS04やSS10は疊が詰まっておらず、掘込周辺へと散在している様子から使用後の状態を示しているものと考えられる。SS08は各構成疊が大きく、堀込も持たない。配石に近いものといえる。

各集石とも使用石材の大半は砂岩であるが、遺構個別に見てみると構成疊の平均重量に偏差がある。SS02は構成疊の大半が100g未満であり、ゴルフボール大の疊が目立った。小型の疊を意識的に選択して使用していたようである。

集落立地

調査区の西側を中心に集石遺構が構築されていることや、南へ向けて地形面レベルが下っていることを勘案すると、該期の集落の中心は調査区の北側に広がっていたものと推定される。おそらく微高地状になっていたものと思われるが、調査区周辺では現代の宅地開発による地形変更が著しく、正確な旧地形は判然としない。また、調査区の北側50mには西から東へ入り込む狭小な谷地形が形成されており、現状では水田として利用されている。このような場所が水源地となっていた可能性も考えられる。

都城盆地における縄文時代早期遺跡には、岩立（都城市史編纂委員会(編)2006)、屏風谷第1（都城市教育委員会1992)、白山原（都城市教育委員会2002)、池島（宮崎県埋蔵文化財センター2004)、梅北佐土原（都城市教育委員会2007a)などがあり、市域の北部から南部にかけての各所で該期遺跡が見つかっている。

これらの内、早期中葉段階に該当する資料が検出されている遺跡としては、梅北佐土原、屏風谷第1などが挙げられる。特に本遺跡から南西へ2.5km程離れた梅北佐土原遺跡は台地縁辺部の遺跡で、別府原式、加栗山式、下剥峯式のほか石器類も検出されている。ここでも集石遺構が検出されており、また出土している

土器型式の状況から本遺跡に時間的にも近接しているものと捉えうる。

ところで、本遺跡は扇状地の微高地に位置している。従来、当地域における縄文時代早期遺跡の調査事例は、先述したものも含め、シラス台地縁辺部や丘陵上に位置するものが卓越している。しかし、近年では先に挙げた白山原遺跡、池島遺跡や中町遺跡（都城市教育委員会1998）のように盆地底部の低湿地上の微高地や加治屋B遺跡（都城市教育委員会2007b）のように河川沿いの河岸段丘上においても同時期の遺跡が確認されている。白山原、池島、加治屋Bでは遺物のみならず集石遺構も検出されており、一定の定住性を認めることができる。現在のところ、都城盆地では未だ明確な住居跡と見られる遺構、ひいては集落の様相が分かれる遺跡は見つかっていない。様相は不明瞭であるが、今後は集落立地とそれに係る問題についての検討も必要となってこよう。

今回の調査では縄文早期を主体とした遺構、遺物が検出された。該期の調査事例は都城市域全体でもさほど多いとは言えない状況にある。今回得られたデータは出土遺物が僅少ながらも一つの蓄積となった。また、本調査区ではアカホヤ火山灰層（5層）上位の文化層が削平されていたが、廃土中の遺物から弥生～古代にかけての遺跡も存在していたようである。付近では王子原第2遺跡（都城市教育委員会2004）において古代の遺構、遺物が検出されており、周辺には集落が点在していたようである。

注釈

1. 小牧3Aタイプと思われる資料は、本遺跡と同じく都城盆地南部に位置する安久中原遺跡においても1例があるが採集されている（都城市教育委員会1987）。胴部片であるが、外面に密接な貝殻刺突文が施文されている。

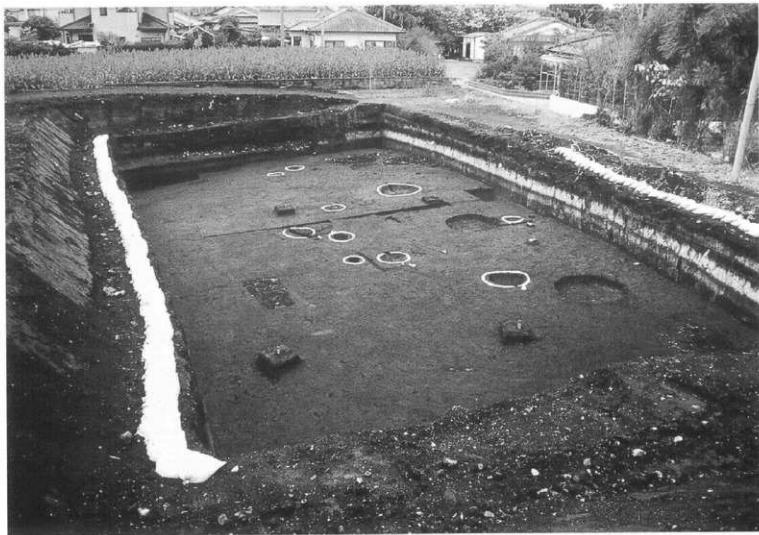
【引用・参考文献】

- 上杉彰紀 2006 「南九州における縄文時代早期前半の様相－平底円筒形押盟文土器の位置づけをめぐって－」『九州縄文時代早期研究ノート』第4号 九州縄文時代早期研究会
九州縄文研究会 2003 『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』第13回九州縄文研究会宮崎大会発表要旨・資料集 九州縄文研究会
黒川忠弘 2002 『南九州貝紋文系土器I～鹿児島県～』 南九州縄文研究会
根占町教育委員会 2000 『大中原遺跡』根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 根占町教育委員会
日高広人・柳田裕二 2003 『宮崎県の集石遺構と炉穴』『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』第13回九州縄文研究会宮崎大会発表要旨・資料集 九州縄文時代研究会
都城市教育委員会 1987 『都城市遺跡詳細分布調査報告書(市内南部)』都城市文化財調査報告書第6集 都城市教育委員会
都城市教育委員会 1992 『屏風谷第1遺跡』都城市文化財調査報告書第17集 都城市教育委員会
都城市教育委員会 1998 『中央東部地区遺跡群 柳川原遺跡(第1～3次調査) 中町遺跡(第1・2次調査)』都城市文化財調査報告書第43集 都城市教育委員会
都城市教育委員会 2002 『白山原遺跡』都城市文化財調査報告書第57集 都城市教育委員会
都城市教育委員会 2007a 『梅北佐土原遺跡』都城市文化財調査報告書第76集 都城市教育委員会
都城市教育委員会 2007b 『加治屋B遺跡(縄文時代・弥生時代編)』都城市文化財調査報告書第81集 都城市教育委員会
都城市史編纂委員会(編) 2006 『都城市史 資料編考古』 都城市
宮崎県埋蔵文化財センター 2004 『池島遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第84集 宮崎県埋蔵文化財センター

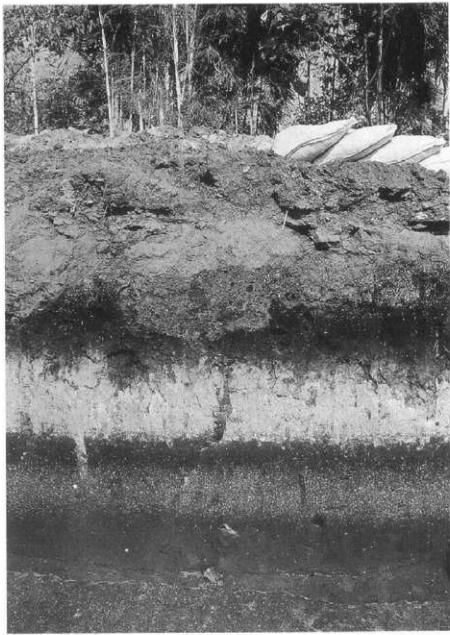
図 版 -PLATES-



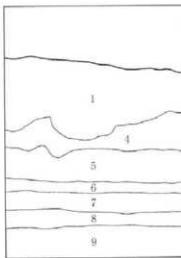
中郷中学校生徒を対象とした遺跡見学会の様子



調査区全景（東から）



基本層序（調査区北壁）



図版2



A2・B2区散礫検出状況（南東から）



SS01検出状況（南から）



SS02検出状況（南から）



SS04検出状況（南東から）



SS05・SS06・SS09・SS10検出状況（南から）



SS05検出状況（南から）



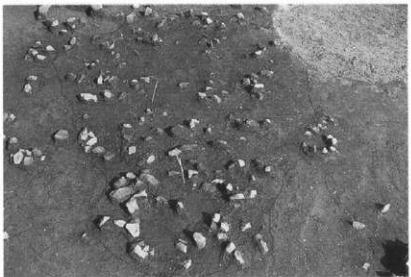
SS06検出状況（南から）



SS05完掘状況（南から）



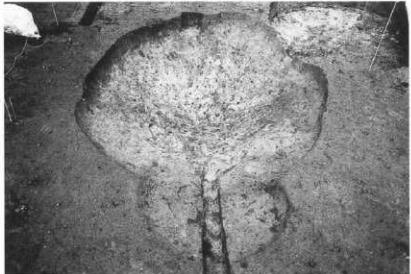
SS07・SS08検出状況 (西から)



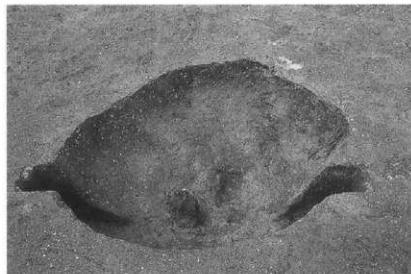
SS09・SS10検出状況 (南から)



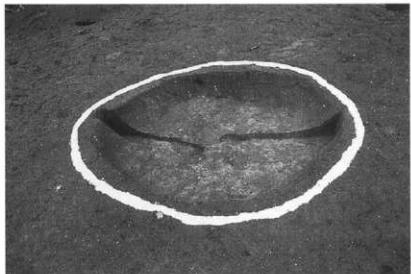
土器(4)検出状況



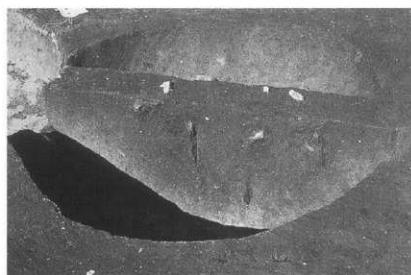
SS09・SS10完掘状況 (南から)



SC01完掘状況 (南から)



SC03完掘状況 (南から)



SC04土層断面 (東から)



SC04完掘状況 (東から)

図版 4



1 (正面)



1 (背面)



2



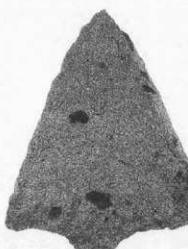
3



4



7



5 (正面)



5 (背面)

報告書抄録

書名	梅北原遺跡					
副書名	公立中学校施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第83集					
編著者名	加賀淳一					
編集機関	宮崎県都城市教育委員会					
所在地	宮崎県都城市菖蒲原町19-1 都城市役所菖蒲原別館					
発行年月日	2007年10月1日					
所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
梅北原遺跡	宮崎県都城市 梅北町2912-1 中郷中学校内 普通教室棟	31°41'6" 付近	131°4'23" 付近	2006年9月21日 ～ 2006年12月19日	312m ²	学校建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
集落	縄文時代早期	集石遺構 土坑		縄文土器 小牧3Aタイプ 下剥峯式土器 押型文土器		

遺跡の緯度及び経度は世界測地系にもとづく。

都城市文化財調査報告書第83集

梅北原遺跡

- 公立中学校施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2007年10月1日

編集 宮崎県都城市教育委員会 文化財課
 発行 〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町19-1
 TEL (0986)23-9547 FAX (0986)23-9549

印刷 株式会社みやこ印刷
 〒885-0026 宮崎県都城市大王町51-22
 TEL (0986)23-1682 FAX (0986)22-1682